



CONTENTS

私の研究から	高橋 淳	2
地域の病院に想う	安井博史・柴田 大	4
開業苦労ばなし	山崎裕通	8
子育て奮戦	古野和歌子	9
著書を紹介	倉原 優	10
教授就任	奥田奈賀子	11
支部会 滋賀支部	山岡水容子・岡田清春	12
大阪支部	卯津羅祥子	15
関東支部	笠原真吾・北村 拓・三澤結乃・三谷真吾・和田信一朗	16
お誘い・お知らせ	大関信武	18
西医体	バドミントン部・硬式テニス部(男子・女子)・サッカー部・バスケットボール部(男子・女子) 女子バレーボール部・ヨット部・水泳部・ハンドボール部・端艇部・陸上部・合気道部・卓球部	19
訃報		25
事務局から	総会議事録 ほか	32

私の研究から



信州大学医学部運動機能学教室(整形外科)
准教授

高橋 淳 (医12期生)

医学部12期生の高橋淳です。この度、同期の高瀬年人先生に推薦していただきました。小生がこれまで行ってきた研究の紹介をしたいと思います。2016年6月18日に大津プリンスホテルで開催された、第15回ASOS学術講演会において、「脊柱側弯症の診断と治療」というタイトルで、滋賀医科大学整形外科の同門の先生方の前で講演させていただく機会をいただきました。今井晋二教授、森幹士講師にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

小生は1992年滋賀医科大学を卒業し、故郷の信州大学医学部整形外科に入局させていただきました。関連病院勤務の後、1998年7月から信州大学整形外科脊椎班の医員として、脊椎外科医として、臨床・研究・教育を行っていくことになりました。



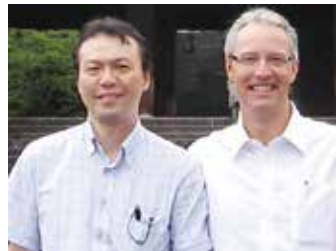
1996年に、現在長野県松本市で開業しておられる、上村幹男先生(当時信州大学整形外科助手)が日本で初めて、脊椎ナビゲーションシステム(左写真)を信州大学に導入されました。これは、術前に患者さんの脊柱を1.25mmスライスでCTを撮影し、DICOMデータとしてCD-Rに保存します。ナビゲーションのプランニング用のPCにこの情報を読み込

み、手術予定の椎骨に挿入するスクリュー径と長さを計測します。術中椎骨が展開されたら、棘突起という部位にリファレンスフレームというものを装着し、コンピュータ上の情報と術野を、registrationという作業を行うことにより一致させます。その後、術者が示している部位、方向が、リアルタイムにコンピュータ上で確認できるというすぐれた装置です。

私は1998年にこのナビゲーションを使った手術を上村先生から教わりました。当時、滋賀医科大学整形外科でも積極的に研究されてきた、リウマチ頸椎再建手術に、このナビゲーションシステムを使って、安全で正確な手術が

ナビゲーション手術と側弯症

出来ないかと考え、骨が小さく、変形が強く、骨粗鬆症のあるリウマチ患者の頸椎の椎弓根という、脊髄・椎骨動脈・神経根が近接する部位に椎弓根スクリューをナビゲーションを使って正確に刺入するという手術の症例を重ね、2007年にEuropean Spine Journalに報告しました。頸椎のナビゲーション手術については多くのpaperが出ています(Open Orthop J. 2010, World Neurosurg. 2010, Asian Spine J. 2012, Eur Spine J. 2014, Asian Spine J. 2014, Spine J. 2016, Asian Spine J. 2016)。また、当時、ナビゲーションを使うと手術は正確だけれども、registrationという作業を、通常は1椎ずつで行うため、手術に時間がかかるという欠点がありました。2004年に北海道大学から加藤博之教授が赴任されました。2005年に脊椎グループのチーフにならせていただき、側弯症の手術を術者として始めました。また、2008年には小児側弯症の世界的権威である、Peter Newton (University of California, San Diego) 先生(写真右)のもとに小児側弯症の勉強に行かせていただき、小児側弯症の診断と治療について勉強させていただきました。



頸椎手術でナビゲーションの実績を積んでいたことから、小児の難易度の高い側弯症の手術に、このナビゲーションが応用できないかと考えていました。側弯症も椎弓根という部位にスクリューを挿入し、ロッドという金属棒を使って矯正するのですが、胸椎は肋骨が付着しており、椎骨間があまり動かないのではないかとの仮説の元、3椎続けてregistrationを行う、multi-level registration

法を世界で初めて考案し、2010年のSpineに報告しました。この方法によって、通常は5時間以上かかる胸椎カーブの側弯症手術を3時間台で行えるようになりました。

側弯症の手術は1996年に韓国のSuk先生が考案した、可及的すべての椎骨にスクリューを刺入するsegmental pedicle screw法が世界の主流になっていました。私は、ナビゲーションを使っていましたが、スクリュー刺入には、脊髄・神経根、大動脈・肺損傷のリスクがあり、大きくて硬いカーブにはたくさんのスクリューが必要であるが、小さくて柔らかいカーブにはたくさんのスクリューは必要ないのではないかと側弯症の手術を始める時から考えており、カーブの大きさ・硬さに応じてスクリューをスキップする、skip pedicle screw法(下写真)を考案しました(Spine 2010, J Orthop Sci. 2013, Eur Spine J. 2014, J Orthop Sci. 2016)。現在、この方法による側弯症矯正手術の妥当性に関する論文が増加しています。さらに、信州大学繊維学部機械・ロボット学系 バイオエンジニアリング過程小関道彦准教授との学術振興会科学研究費補助金基盤研究C「思春期特発性側弯症患者に対する後方矯正固定術に必要なスクリューの数の最適化」の側弯矯正のコンピュータシミュレーション共同研究が進行中です。

以上、小生の脊椎外科医としての今までの仕事について述べてきました。小生は、滋賀医科大学学生時代にヨット部に所属していました。思い返してみると、ヨットで学んだこと(体力、チームワーク、戦略、トラブルシューティング、忍耐力、平常心など)が今の脊椎外科医としての仕事に活かされています。学生時代、私を育ててくださった滋賀医科大学に感謝いたします。



地域の病院に想う

がん治療に携わり学んだこと



静岡県立静岡がんセンター
副院長兼消化器内科部長
安井 博史
(医17期生)

16期生、17期生の皆様お久しぶりです。私は現在、静岡県立静岡がんセンターで消化器内科(腫瘍内科)として勤務しています。あの安井が、安井さんが、なぜそのような病院で、またそのような立場でいるの??と不思議に思われる方が多いかもしれませんが、正直自分でも良くわかりません。では、少し静岡がんセンターの紹介をさせていただきます。

静岡がんセンターは静岡県東部の端、長泉町にあり、写真のように背後には雄大な富士山が病院を包み込むように建っています。病床数は全615床、そのうち緩和専用病床が50床あり、「患者さんの視点の重視」を基本理念に掲げ、高水準のがん医療を追求しながら、患者さんとご家族の心身のケアを重視した全人的医療を実践しています。私の部署である消化器内科は、いわゆる oncologist ですが、頭頸部がん、食道がん、胃がん、胆道がん、膵がん、大腸がん と多くの癌腫の全身化学療法(周術期含む)と、症状緩和、支持療法を受け持ち、病院では年間1000人以上の看取りも行っています。



静岡県立静岡がんセンター

静岡県最東部、長泉町の丘の上にはがんセンターがあります。「患者さんの視点を重視」を基本理念に、患者さんとご家族の心身のケアを重視した全人的医療を実践しています。

①

私がこの病院にレジデントで行ったのが今から12年前ですが、当時は今のように抗がん剤治療や緩和治療が普及しておらず、消化器がんの化学療法は標準治療すらほとんどないのが現状でしたし、私もほとんど抗がん剤を扱ったことがない状態からのスタートでした。今思えば専門用語もちんぷんかんぷんで当時は非常に苦労しましたが、現在の標準治療の開発の過程、化学療法の進歩を身近で感じる事が出来、多くの患者さんの治療に携わることが出来たことは、私にとって非常に幸運だったし財産になっていると感じています。

私がかれまでがんセンターで多くの患者さんや新薬の開発にあたってきて改めて思うことは、やはり患者一人一人に真摯に向き合うことの大切さです。これはがん治療に限ったことではないですが、患者さん各々の病態や全身状態だけでなく、色んな考え方や人生観、色んな環境(家庭や仕事)など総合的に考え最善の道を一緒に考えるための力、「人間力」を磨かなければならないと学びました。まだまだ完治困難ながん治療の現状で、その患者さ

んや家族が残りの時間を有意義に、その人らしい時間が少しでも多く取れること、それを色んな手段を駆使してマネジメントして行くことが我々腫瘍内科医の使命であり、腕の見せ所だと思っています。

そんな腫瘍内科医を目指したい先生、是非当院へ見学にお越し下さい。美味しい海の幸、温泉を用意してお待ちしております。

最後になりましたが、現在の私の医師としての基礎をご教示頂いた、旧第2内科の先生方にこの場を借りてお礼を申し上げたいと思います。私も、いつの日か母校に恩返しができるよう頑張っていきたいと思います。



消化器内科スタッフ、レジデント

私の自慢のスタッフ8名とレジデント7名が
全消化器がんの化学療法(周術期も含む)、緩和治療、支持療法を担当します。

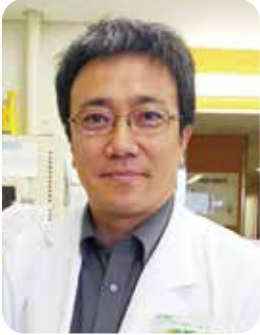


2015年2月琵琶湖ホテルで講演会

お世話になった母校の消化器内科(旧第2内科)安藤教授にお招きいただいて、念願の滋賀での講演。本当に嬉しかった……(涙)。

地域の病院に想う

市立川西病院での勤務



市立川西病院 内科
柴田 大
(医23期生)



皆様こんにちは。平成15年卒の柴田と申します。わたくしは滋賀医科大学卒業後約10年で現在の勤務地である市立川西病院内科に配属となりました。

当院のある川西市は兵庫県の東の端であり、猪名川をはさみ大阪府と境を接しております。場所柄阪神間といわれる領域の北限に位置する病院となるため、当院周辺の地域からの紹介症例も診察いたします。

当院は200床余りの小さな公立病院で内科、外科のほか小児科、泌尿器科、整形外科、放射線科、眼科の常勤医と耳鼻科、脳外科の非常近医で診療に臨んでおります。小規模の病院ではありますが、私の診療領域である血



液内科は9床の無菌室病床をいただくことができ、何とか赤字を出さず診療を続けております。また、一昨年からはじめ、昨年は4例ほどの実施を見るに至りました。

血液内科の治療を運用するには、どの分野でもそうであると思いますが、ことのほか病棟や外来の各領域のスタッフとの連携が欠かせず、移植のような患者の生活を丸抱えするような治療をやろうとすると医師以外あるいは病棟以外の各部門のスタッフとの連携がいかに大事かが身に染みて思われました。さすがに大学病院や研修先の病院では病気の仕組みや治療のことはよく教えてくれても、スタッフ間の連携や「チーム医療」の構築は逐一教え

てくれませんでしたので、実際に治療計画を理解してもらい、チームとして患者の治療にどうかかわっていくかを各部門のスタッフに理解してもらっていく過程は大変貴重な経験でありました。どうしても医師という立場上指示を出す、指導する、という面倒な立場がついてまわるのでスタッフへなかなか感謝することが難しいのですが、患者が助かるために、と労を惜しまない病棟や外来のスタッフには頭が下がる思いです。彼らは、彼女らは、実に誠実で勇敢だと思います。

当院に赴任して今年4月で6年となります。残念ながら血液内科分野の専門医は私一人ではありますが、皆様に支えられ少しずつやれることを増やしていこうと思います。

かさま小児科

山崎 裕通 (医9期生)

開業

苦勞

ばなし

開業15年



皆さんこんにちは。医学科平成元年卒業の山崎裕通(やまざきやすみち)と申します。2001年4月に滋賀県草津市笠山に「かさま小児科」という診療所を開設し、現在15年半を経過しております。場所は名神高速草津PAの近く(母校まで車で5分!)でして、滋賀医大卒業者では母校から最も近いところで開業していることになります。開業後も紹介患者さんなど母校にはお世話になりっぱなしで、この場を借りて改めて感謝申し上げます。

さて、開業して15年たちますと、開業当時患者さんだった子どもたちはみなさん大人になります。大人になった元(現?)患者さんはいったいどうなったのでしょうか?

子どもを連れてきてくださる方(親になったのですね)がおられたり、重症の患者さんを搬送しようと救急車を手配したら救急車の運転手が子どものころから成人になってもずっと来てくれているかかりつけの患者さんだったり、さらには母校の後輩となり、医師を目指す学生さんがおられたり……、立派になった姿を見聞きすることができるのが、開業医ならずとも小児科医の醍醐味ではないかと感じております。

時代の趨勢通り、開院当初と比べると当院周辺でも子どもの数が少なくなりました。高齢者の在宅医療を昨年からはじめましたし、今年は初めて在宅の看取りを経験いたしました。現在、体調不良のため、規模を縮小しての診療を余儀なくされていますが、これから開業医としての後半戦がどのようにしていくのか、時の流れに身を任せながらなんとか「のれんをおろすこと」なく、診療を続けていければと思う今日この頃であります。

今後ともよろしくお願い申し上げます。



子育て奮戦 日々



神戸市立医療センター西市民病院 精神・神経科

古野 和歌子 (医28期生)

湖医会会員の皆様、初めまして。また、元同期の皆様、大変ご無沙汰いたしております。

当方ですが、卒業後、神戸で初期研修を開始、2年目の後半に6か月精神科を選択、そのまま精神科に進みました。はや医師歴9年近く、精神科「所属」歴丸年近くですが、当方の場合、諸先生方のご配慮の下、初期研修終了時に医局所属と同時に産休に入り、第1子出産、育休を頂戴し、1年後から後期研修開始、さらに第2子出産・育休を経て約2年仕事から離れており、正味医師歴7年・精神科歴5年というところですが、本来的(?)には必死に医師としての研鑽を積むべき時期でしょうが、常に目の前のやりくりに追われ、今に至るまで深まりのないまま、また精神科医師として重要である精神保健指定医等の資格も未取得のままドタバタ日々が過ぎております。昨年からは現在の職場に異動し、憧れの(!?) 正職員として育児時短制度を利用開始いたしております。おかげ様である程度余裕をもって保育所2か所送迎(別々の保育所に通所中)や小児科等子の医療機関受診が出来ております。



パワフルに、はたまた美しく、仕事と育児を両立される方も多く、これでよいのかと自問自答することも多く、学生時代にご出産された方や育児の諸先輩方からは甘いとか叱責を受けそうですが、いわゆるワンオペ育児の中、自分の能力・体力を顧みると、ほそぼそとでも資格を通して地域医療に従事できているのは落としどころとしてはまずまず上々なかもしれないと自分に言い聞かせております。また、大雑把な性格ですので、育児に「専念」していたらきっと息が詰まっていることでしょう。仕事も育児も中途半端ながら、子どものよだれや鼻水、食物残渣にまみれつつ、両方かかわることができていることに感謝する日々です。

これから人口減少・高齢化し、国家財政が厳しくなるなかで医療がどのように変化するか分かりませんが、今紅葉手の子どもたちが22世紀まで健やかに、また穏やかに生活できる社会が維持できるよう、微力ながらもお役に立てれば、と願っております。



滋賀医大の試験対策プリントが 執筆家としての源流

国立病院機構近畿中央胸部疾患センター 呼吸器内科

倉原 優 (医26期生)



私は現在、堺市にあるという病院で呼吸器内科医をしています。呼吸器内科医が30人くらい在籍している、呼吸器疾患の高度専門病院です。私は3~4年ほど前からほうぼうのメディアに顔を出すようになり、そのおかげで名前を知ってくださっている人もいるかもしれません。また、後輩の方々の中には「倉原」という名前に聞き覚えのある人もいないのでしょうか。

滋賀医科大学に通っていた頃、同級生での私の位置付けは、まさに“試験対策係”でした。別に自分から買って出たわけではないのですが、授業の内容をまとめて試験対策プリントを作るのが好きだったので、試験前にはいつの間にか「倉原プリント」が出回っていたと記憶しています。プリントは後輩たちの間でも使われていたので、同時期に在学されていた方は、「あの倉原か!」と思っていたかもしれませんね。



当院の気管支鏡件数は日本屈指です

研修医の頃に、勉強した内容をまとめたウェブサイトを作ろうと思い、ブログ「呼吸器内科医」(<http://pulmonary.exblog.jp/>)を立ち上げました。そこで、読んだ医学論文の和訳や独自のエッセイを書くようになりました。ブログを見た出版社からオ

ファーがあり、2013年に医学書執筆家デビューを果たしました。現在、連載を月に6本かかえ、執筆した書籍はとうとう10冊を超えてしまいました。あの「倉原プリント」から始まった小さな川が、いつの間にか大河になってしまいました。

代表的な著書を紹介させていただきますと、「呼吸器の薬の考え方、使い方」や「ねころんで読める呼吸のすべて」シリーズなどがあります。最近は医師向けだけでなく、ナース向けや一般向けの書籍も執筆しています。普段は呼吸器内科医としてバリバリ働いており、子どもたちを寝かしつけた後に執筆をしています。



院内コンサートではいつも懐メロを弾いています

年に1回の院内コンサートでピアノを演奏するたびに、滋賀医大の福利棟の2階にあったアップライトピアノを毎日のように使っていた大学時代を思い返します。あのピアノ、まだあるんでしょうか。

私の今の医師生活のすべてが、滋賀医大で過ごした青春時代とつながっているのです。呼吸器疾患でお困りの際は、いつでも私にご相談下さい。



教授就任 ごあいさつ



人間総合科学大学 健康栄養学科 教授
奥田 奈賀子 (医25期生)

私は平成17年に卒業した25期生で、同級生の多くは卒後10年を経て専門医として活躍しています。「早すぎる教授就任では」と思われるでしょうが、滋賀医大との出会いは福祉保健医学講座(現在の社会医学講座公衆衛生学部門)の研究補助員に採用された平成5年に遡ります。そこで、当時の上島弘嗣教授(現名誉教授)、岡山明助教授(現合同会社生活習慣病予防研究センター代表)のもと、栄養疫学研究との出会いがありました。高卒後に進んだ京都大学農学部で生物学は一通り勉強したものの、「栄養疫学」は聞いたこともない、真っ新たな目でのスタートでした。

それからの約3年間は、世界一流の精度で計画された国際栄養疫学研究INTERMAPの実施に直接関わりました。この経験から、人の健康に関わることを自分の仕事とする気持ちが生ま

れ平成9年の医学部入学に至りました。

医学部入学後も、INTERMAP研究のデータ解析を継続してコツコツと書いた論文が英

文ジャーナルに採択されたのは、医学科6年の秋のことでした。医学部卒業後は附属病院での前期臨床研修医を経て、古巣の社会医学講座公衆衛生学部門、国立健康・栄養研究所などでの勤務の後に、人間総合科学大学健康栄養学科(さいたま市)で教鞭をとるに至りました。この間、NIPPON DATA研究班などに加わせていただいております。

二十数年前に滋賀医大で働き出した当時の、何の専門性も持たなかった私からは全く想像しない展開でした。人口減少社会が本格化する今の学生にも、予期しない未来があるのでしょう。

研究者として日本の保健医療の発展に少しでも貢献するとともに、学生たちが激動の社会を生き抜くためのサポートになるような教育をと、努力してまいる所存です。今後とも、ご指導ご鞭撻よろしくお願ひ申し上げます。

滋賀医大との出会いから

第2回 滋賀支部会に参加して



甲南病院 健診センター長
山岡 水容子
(医11期生)

何よりもはじめに2期生、山田尚登先生の副学長ご就任を心からお慶び申し上げます。私たち同窓生の誇りです。精神医学講座教授とのご兼任で益々ご多忙かと存じますが、今後ともどうぞよろしくご指導のほどお願い申し上げます。

2年前の湖医会滋賀支部の立ち上げ会から連続参加させていただいています。

研修医を終えて以来、足が遠のいていた大学の近況と課題を塩田学長から直々に伺うことができました。老朽化のすすむキャンパスや研究棟の改修のみならず、職員の意識改革や大学が特色を出していくための企画戦略の必要性、また、滋賀医大の存在感を高め、若い人たち



滋賀支部



がここで仕事をしたいと思える環境を造るためにご尽力されていることが伝わってまいりました。

一人でも多くの卒業生が滋賀医大に残ってくれることはこの日ここに集まった同窓生の切なる願いであることは言うまでもありません。そしてそれが将来地域医療に貢献する医師の増加にも繋がることを期待します。

この日同席した私の勤務先である甲南病院の渡田院長と田中副院長から、地域の中小病院が安定して医師確保できるシステム構築を切望する発言がありました。大学から来ていただいている医師のお陰で成り立っている診療科もあるので、急に来ていただけなくなると主治医を失った患者さんたちは置き去りにされ、不安に陥ってしま

います。地域の方々が安心して受診できる病院であり続けるために、是非とも院長・副院長の願いが届くようご配慮のほどよろしくお願い申し上げます。

私の仕事は健診で、甲南病院では5年になります。お陰様で年々受検者数は増え続け、そのほとんどがやはり地域の住民、企業の方々です。微力ながらも全力で受検者さんたちが健康でいられるようサポートしていきたい一心です。

最後になりましたが、院長・副院長が同窓生で、いつも一緒にこの会に参加させていただけることをとても幸せに感じます。次回は若い世代の後輩もお誘いして参加させていただこうと思います。



第2回 滋賀支部会に参加して



おかだ小児科医院
岡田 清春
(医8期生)

滋賀医科大学同窓会「湖医会」第2回滋賀支部会が平成28年8月21日にホテルポストプラザ草津 ケネディルームにて開催されました。

支部代表前川聡先生と「湖医会」会長渡辺一良先生の挨拶の後、第一部として滋賀医大学長塩田浩平先生が大学の近況と課題について話され、その後に滋賀県健康医療福祉部次長角野文彦先生が滋賀県の医療構想について話されました。

出席者は30名強でした。2期生が一番多く、4期生までで半分を占めていました。私より下の12期生以降は看護科も含め、たった4人でした。今後の課題として若い先生方が参加するにはどうすればよいか方策を講じなければならぬという議論もありました。

卒業生の動向をみると地方の医科大学としては多くの人が滋賀医大に残り、大学の使命である教育・研究・診療という機能は充分果たしてると感じました。医師の派遣について現在ではもはや大学医局の力はほとんど及ばなくなりましたが、地域、特に大津、草津栗東医療圏以外には、まだまだ医師が足りず、大学に医師の派遣を強く要望されておりました。医師の減少はたちどころに、患者さんの不利益、さらには病院経営悪化につながり、病院の存続にも関わる問題であります。医師の偏在、医師の派遣については、なかなかいい解決法がないと感じています。少なくとも、滋賀医大に入学した方を県内にとどまってもらうような方策が湖医会でできないかという話にもなっています。

角野文彦先生の話で最も印象に残っているのは医師の活動は日本国憲法25条 第2項『国は(略)公衆衛生の向上及び増進に努めなければならない。』に基づいているという行でした。すなわち、医師法 第一章第一条『医師は、医療及び保健指導を掌ることによつて公衆衛生の向上及び増進に寄与し、もつて国民の健康な生活を確保するものとする。』につながるわけです。

なんか日本国憲法が身近に感じられ、もっと精進して医療及び保健指導を掌り、公衆衛生の向上及び増進に努めなければならないと気持ちを新たにしました。特にほとんど診療報酬ではあまり評価されていない保健指導を掌ることの重要性を感じていた今日このごろでありますので、特に刮目した次第です。

今回まで、参加されていない先生方も、同期会では実現しない先輩後輩との懇親を深める場として、有意義な会であると思いますので、ぜひ来年の第3回滋賀支部会でもっと多くの先生方とお目にかかれたらと思います。

最後に私は「湖医会」滋賀支部会には、ただただ懐かしい先生方とお会いして、酒席を共にできることが嬉しくて、2回連続で出席しただけの田舎の小児科開業医です。その私にこのような文章を書かせて頂く機会を頂きましたことに感謝いたします。

琵琶湖カンファレンス IN 大阪 2016 開催のご報告

平成28年6月26日(日)、梅雨の晴れ間の日に、大阪府中央区の難波御堂筋ホールにおきまして2016年度の琵琶湖カンファレンスを開催いたしました。

今年度は、基調講演として8期生の田村祐樹先生、特別講演として11期生の松村一弘先生にご講演を賜りました。

田村先生は、**がんとスピリチュアリティ**と題して、人の心のあり方は人それぞれで有り、お互いの思いの違いを受け入れることの大切さを話して下さいました。医師である前に一人の人間として、患者さんだけでなく、家族やスタッフ等自分と関わりのあるすべての人との接し方を改めて考えさせられました。

松村先生は、「**総合診療医とは**」と題して、現在の総合診療医の立場、滋賀医大を中心として進められているプロジェクトについて話して下さいました。国は在宅医療を推進していますが、実際自宅で看取ることの難しさを日々実感している私としては、総合診療医というシステムが早く実践的に機能して欲しいと思います。

いずれの先生のお話も大変興味深く勉強になりました。

講演会後の情報交換会では、1期生から30期生まで、合計22名の同窓生がざっくばらんに近況報告をしながらおおいに盛り上がりました。



うづら医院 卯津羅 祥子 (医8期生)

大阪には300名以上の卒業生がいるそうです。今回、久しぶりにお会いして、こんなに近くにおられたんだ!と驚いたり、同級生に久しぶりに会ったり本当に楽しい会になりました。

学年や診療科を超えて滋賀医大の同窓生が気軽に情報を交換、共有し、患者さんのためによりよい医療提供できるように、この会が少しでもお役に立てたらと思います。

今回参加いただけなかった同窓生の皆様、是非来年の会にお越しください。 (当番幹事)



支部会

厚生労働省で働くということ



厚生労働省健康局健康課
笠原 真吾
(医31期生)

今年もまた、湖医会関東支部会の季節がやってまいりました。例年、世界で活躍されている先生から高尚なご講演をいただいておりますが、今年は珍しいキャリアを選んだ若手として、当職に白羽の矢が立ちました。

当初、「今後の医療はどうなるのか」といったテーマをいただいたのですが、諸先輩方の前で若造がお話するにはあまりにも重く、憚られました。そこで、厚生労働行政を身近に感じていただき、今後の医療について考える際の素材にさせていただけるようにと、これまで担当した診療報酬改定や健康政策について、一担当者の視点から飾らずお話ししたところ、講演後の質疑が大いに盛り上がり、専門医制度と報酬の関係から終末期を経た死の受け止め方まで、充実したディスカッションを重ねられました。ひとえに先生方のご見識のお陰です。その後、議論のつきないまま懇親会に移行したのですが、その最中には現役学生の方からも骨太なご意見をいただき、大変嬉しく思いました。

今後とも、周囲の若手と共に参加することで、益々の発展に貢献してまいりたいと思います。



■ 関東支部会に参加して

●北村 拓 (医学科1回生)

この度の関東支部会は、私にとっては第一線で活躍するOBの先生方から直にお話を伺う初めての機会でした。講演では日頃あまり馴染みのない官庁での医師の働き方を知ることができ、大変勉強になりました。理路整然として非常にわかりやすいプレゼンテーションで、伝え方の重要性を痛感いたしました。

また、懇親会では熱意溢れる先生方から医療や滋賀医大に関するお話を興味深く聞かせていただくことができました。学生生活へのアドバイスも今後大いに活かして参りたいと思います。何より、関西の大学ながら毎年関東での集いがあるという繋がりや強さ、そして先生方のお言葉の端々から感じられる愛校心の強さに心を打たれ、滋賀医大への思いを新たにしました。学生で連続の参加はあまりないということですが、来年もぜひ参加させて頂いたら幸いです。この度は本当にありがとうございました。



●三澤 鮎乃 (医学科1回生)

笠原先生の厚生労働省の講演では、普段あまり聞くことのできない貴重なお話しをしていただき、勉強になったとともに厚生労働省に対しても興味を持つきっかけになりました。当初は、医学科1年の自分が関東支部会に参加していいものなのかと思っていましたが、先生方に色々なお話しを聞くことができ、また、交流を深めることができ大変有意義な時間を過ごすことができました。私は東京出身で、将来も東京で働くつもりなので、関東の先生方皆様には今後もよろしくお願ひ申し上げます。来年も予定が合えば是非参加させていただきたいです。有り難うございました。

●三谷 真吾 (医学科1回生)

前半においては厚生労働省の笠原真吾先生から熱意あふれる医療政策についての講演を、その後の懇親会・2次会では、卒業生の方々のこれまでの長年の医師としての経験に裏打ちされた密度の濃いお話を伺うことができ、滋賀県にとどまって

関東支部



いたのでは見聞きすることのできない貴重な経験をさせていただきました。

近畿から遠く離れた関東の地において、多くの先輩方が臨床をはじめとする各方面で活躍しておられることを知ることができ大変心強く感じたと同時に、これら輝かしい歴史に恥じない医大生・医師になろうと気持ちを新たにしました次第です。

最後になりましたが、本学に入学して右も左もわからぬ状態の筆者を温かく迎え入れてくださった関東支部会の皆様に心より御礼申し上げます。

●和田 信一郎 (医学科1回生)

この度は本当にありがとうございました。非常に有意義な会で、自分の進路や今後何を学んでいくかということなどを考えるにあたって、沢山のヒント・視角を与えていただけたと思います。会全体のなかで特に印象的だったのは、笠原先生の質疑応

答の時間でした。先生方の突っ込んだ質問、それに明晰に解きほぐされた語り口で即応する(そして答えにくい部分は角が立たないよう巧みに言葉を濁す)笠原先生の回答は、とても考えさせられるもので、その内容も医療者としての真摯な姿勢も学ぶところが多かったです。その後の懇談会で先生方からお話いただけたことも興味深いものばかりでした。特に印象的だったのは朝比奈先生の「患者さんを教育する(糖尿病と付き合っていくということをとって)」でした。その場の流れもあって途中までしか聞けなかったのは残念です。またお話を伺いたいです。個人的には、思っていた以上に多くのことを教えていただくことができた素晴らしい会だったと思います。ありがとうございます。来年以降も、都合が合えばぜひ参加させていただきたいです。今後ともよろしく願いいたします。





スポーツ医学検定

スポーツによるケガを減らし、 笑顔を増やす

医学科22期生の大関信武です。現在、東京医科歯科大学再生医療研究センター・スポーツ医学診療センターで勤務している傍ら、スポーツのケガを減らす取り組みとして、「スポーツ医学検定」を開催しますので、紹介させていただきます。

本検定は、身体やケガの知識を一般の人に伝えることを目的とした検定試験です。ケガを少しでも減らすには、専門家が持つ知識を、スポーツ指導者・保護者・スポーツ選手自身に伝えることが重要だと考えて立案しました。もちろんメディカル関係の方も受検できます。

今まで一般の人にスポーツのケガの知識を普及させる取り組みはなかったため、私が一般社団法人日本スポーツ医学検定機構を設立しまし

た。この理念には多くの医学関係者のみでなく、室伏広治さん(ハンマー投げ)、中竹竜二さん(ラグビー)、谷川真理さん(マラソン)、成田真由美さん(パラリンピック水泳)など、アスリートの方々にも賛同して頂きました。当機構の顧問には、医学科7期生の山崎哲也先生(横浜南共済病院スポーツ整形外科部長・横浜DeNAベイスターズチームドクター)に務めていただいています。

私自身、5年生の時にラグビー部主将として臨んだ西医体で、直前に受傷した下腿疲労骨折のため出場できず、やり場のない気持ちになった経験があり、そのような思いをするスポーツ選手が一人でも減って欲しいと思います。ケガは治す(care)から予防(prevention)する時代が変わりつつあります。

今回は首都圏での開催ですが、いずれは全国に普及させたいと考えています。周りにスポーツに関わる方がおられたら、このような検定があることを伝えて頂けると幸いです。応援をよろしく申し上げます。



東京医科歯科大学再生医療研究センター・プロジェクト助教
一般社団法人日本スポーツ医学検定機構代表理事

大関 信武 (医22期生)



スポーツ医学検定・概要

日時: 2017年5月14日(日)

場所: 東京、横浜、相模原

開催級: 3級(ベーシック) 4800円、

2級(アドバンス) 5400円、併願9800円

受検者: 誰でも受検可能

主催: 一般社団法人日本スポーツ医学検定機構

後援: 東京都江東区、神奈川県、横浜市市民局、相模原市

申込: ホームページ・郵便振替

<https://spomed.or.jp/>

テキスト: 「スポーツ医学検定公式テキスト」

<https://spomed.or.jp/officialtext/>

*まとめて購入し、病院・クリニックなどで販売して頂けます。

まとめて購入の場合、値引きがありますので、ご連絡下さい。

(大関e-mailアドレス: ozeorj@tmd.ac.jp)

フェイスブック: 一般社団法人日本スポーツ医学検定機構

<https://www.facebook.com/spoiken.for.all.athletes/>

「スポーツ医学検定」は、以下のような方におすすめです。

- ① スポーツ指導者、部活の顧問
- ② 部活のマネージャー、学生トレーナー
- ③ 子供のスポーツ選手の保護者
- ④ スポーツのメディカルに関わる人、
これから関わりたいと思っている人
- ⑤ スポーツ選手自身

西医体レポート

1

バドミントン部

女子団体第3位

主将 榮 智徳 (医学科4回生)

女子主将 余田 愛香 (医学科4回生)

徳島県の徳島市立体育館、鳴門総合運動公園体育館で行われたバドミントン部の西医体は今年も熱かった。計30名の医学科の部員が出場し、女子団体戦第3位、個人戦男子シングルスでは高田がベスト8、女子シングルスでは石原が第3位に入賞した。

女子団体は、強豪相手に手に汗を握る展開が多く、3位決定戦では最終試合もフルセットまでもつれたが、しっかりと勝ちきった。個人戦では全力を出せた者、悔いの残る結果になってしまった者それぞれであるが、互いに応援、アドバイスをしあいながら爽やかな試合になった。回戦があがるほどラリーは長く、ショットも速く鋭くなっていく。激しい攻防とともに、高まる緊張感の中で行われる試合に応援にも熱がこもった。

大会終了後、ミーティングを行い、各自の課題を話し合った。それらをふまえ、またこれからの練習、その先の大会へと生かしていきたい。

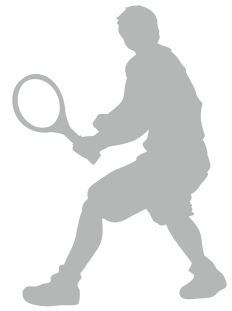
硬式テニス部男子

初戦敗退

主将 長谷川 慶 (医学科4回生)

滋賀医科大学男子硬式テニス部は、徳島県にて行われた第68回西日本医科学学生総合体育大会に出場し、初戦敗退という結果に終わりました。相手は強豪校と言われる大学でした。実際に試合をして、日頃ともに練習をしていた部員と比べて球の質も良く、試合の展開の仕方も上手いと感じました。炎天下での試合の最中に倒れる者が出なかったことから体力はついたと思います。この一年間練習をしてきて部員一人一人が技術面・体力面ともに上達したとは感じましたが、それをはるかに上回る強者たちと大会であたり、競り合う展開になった試合は少なかったです。しかし、この相手校も次の試合で敗退しており、西日本には今回の相手以上の学校が数多く存在しているとわかりました。

大会を終えて、今の私たちの実力がまだまだ未熟であると改めてわかり、次の大会で勝ち上がるにはもっと危機感をもって練習に励まなければならないと部員全員が思い知らされました。これから新しいチームとなり部員全員が今まで以上に貪欲に勝ちにこだわって練習に励んでいきます。次の大会では今回よりも良い結果を報告できるようこれからも部員一同精進して参りますので、これからもご支援・ご指導・ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願ひ申し上げます。



硬式テニス部女子

2回戦敗退

主将 岡野 菜由 (医学科4回生)

滋賀医科大学硬式テニス部女子は、第68回西日本医科学学生総合体育大会において金沢医科大学に敗れ、2回戦敗退という結果に終わりました。昨年の結果を超えることができず、悔しい思いでいっぱいです。試合中しんどい場面にも何度も直面したのですが、暑い中引退された先輩方やOB・OGの先生方がたくさん応援に来てくださり、レギュラー、イレギュラーが互いに支えあってチーム滋賀医大として最後まであきらめずに戦えたことは誇らしく思います。ただ結果がすべてであり、このままでは納得いかないのが正直なところです。幹部が変わってチームもまた雰囲気が変わると思います。まずは春の近医体、そして来年の西医体に向けて今回の大会の悔しさをばねに上を目指して努力していきたいと思ひます。

最後になりますがこうして当たり前のように練習をして大

会に出てチームで一喜一憂できるのは諸先生方諸先輩方のおかげです。心より感謝申し上げます。ありがとうございました。変わらぬご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願ひ申し上げます。



西医体レポート

2

サッカー部

総力戦及ばず

植木 康光(医学科4回生)

今年の西医体は、徳島ヴォルティスの練習場にもなっている徳島スポーツビレッジで行われました。初戦の相手は大阪市立大学で、他の大会や練習試合などでも対戦経験があり、お互いの特徴を知り尽くしているチーム同士の対戦となりました。一年間この大会を目標にして、真夏の暑さにも耐えられるように走り込みも普段のトレーニングで重ねてきましたが、大会前に怪我などで出場できない選手も出て、文字通り総力戦となりました。試合は前半序盤に1失点、後半にも立て続けに失点を許し、反撃を狙うも相手ゴールは遠く、力及ばず0-4と悔しい結果に終わり、初戦敗退で大会を終えました。最後になりましたが、現役部員が少ない中練習に参加して下さったOBの先生方や大会当日現地まで足を運んで応援してくださった方々をはじめ、日頃よりご支援ご声援をくださる皆さまには心より感謝申し上げます。今後ともご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。



男子バスケットボール部

最高の勝利 初戦の1勝

前主将 小西 拓馬(医学科4回生)



終了したときは全員でその喜びを分かち合い、中には嬉しさのあまり号泣する者もいました。西医体という最高の舞台上、プレーヤーとマネージャー全員の最高の仲間とともに、最高の勝利を収めることができました。この勝利は一生の財産になると思います。

西医体は本当に白熱した戦いでした。自分たちよりもサイズで上回る対戦相手でしたが、最上学年を始めとした全員が活躍した試合でした。試合は正に一進一退の攻防が繰り広げられ、どちらが勝利してもおかしくない試合展開が続きました。試合は延長戦にもつれこみました。延長戦では先に相手にリードされる苦しい展開でしたが、上級生の鉄壁の守備と下級生の勢いある攻撃により何とか粘り、最終的には逆転勝ちを収めました。試合が



西医体レポート

3

女子バスケットボール部

強豪校に善戦、2回戦敗退

前主将 澤村 みずき(医学科4回生)

夏の大会の結果を報告させていただきます。まず西医体です。初戦は勝利しましたが、その後2連覇中であったシード校に前半は競ったものの後半に強豪校の力の差を見せられ悔しくも2回戦敗退となってしまいました。しかし、チーム全員が全力で攻め守り応援し楽しい試合でしたので悔いなく終われ

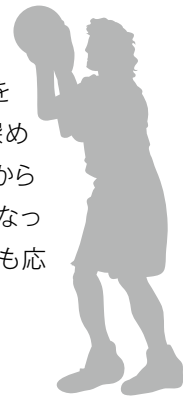


良かったです。そして看護学科も参加できる西コメはリーグ初戦、相手にかなりのリードを許す苦しい展開でしたが最終クォーターから必死の粘りを見せ、ラスト1秒で同点に追いつきそのまま延長戦を制し勝利することが出来ました。この勝利した瞬間の感動は忘れられません。しかし2試合目で最後まで差を縮め切れず3点差で負けてし

まいリーグ2位となりました。

順位決定リーグでは全員出場し危なげなく全勝しベスト4という結果に終わりました。チームで賞状をいただけなかった事は残念ですが、2つの大会という長く暑い夏を通して部員一同の絆をより一層深め

られとても良い経験となりました。これから新チームとなりますが、チーム丸となって頑張っていこうと思います。今後とも応援よろしくお願いします。



女子バレーボール部

少数部員での出場

山川 智理(医学科4回生)

OGの皆様、いつも応援ありがとうございます。

今年の西医体は、初戦で川崎医科大学に敗れてしまいました。先輩方に良い報告ができずに、悔しく思っております。

女子バレーボール部では近年人数が少ない状態が続いており、特に看護学科の部員が試合に出られない西医体では、出場すらできないかもしれないというのが毎年のこととなっていました。しかし幸運なことに、引退後に復帰して下さる先輩や助っ人にきてくれる友人のおかげで、毎年西医体に参加し続けることができました。

今年は医学科の部員6人のうち、3人が引退する年でした。残りの医学科の2人は4月に入部したばかりの部員でしたが、よく練習して、試合でもたくさん活躍してくれました。西医体では看護の部員や、引退したチームメイト、監督(部員のお父さん)にもたくさん助けていただきました。仲良くしていた他チームの皆も試合をみて応援してくれました。本当に恵まれた環境でバレーをさせて

いただいています。

西医体が終わり、医学科の部員は3人になりました。来年、西医体に参加できる可能性はこれまでになく低いかもしれませんが、希望をもってこれからも部員皆で頑張っていこうと思います。



西医体レポート

4

ヨット部

総合7位

前主将 小杉 和希 (医学科4回生)

8月に広島で行われました西医体の結果ですが、470級が7位、スナイプ級が8位、総合7位という結果に終わりました。今まで先輩方が築かれてきた伝統をこのような形で壊してしまったことは非常に申し訳なく感じておりますし、私自身、本当に悔しいです。

私の代は、様々な方に心配され、叱られ、支えて頂きました。例えば、多くの先輩方、時には卒業されたOBの方々も頻りに練習に参加して下さり、現役部員の人数が多いとは言えないながらも、多くの艇数で練習することが出来ました。また、部の運営の面でも未熟だった私に積極的にアドバイスをくださり、本当に助けていただきました。

また、OBの皆様にはセールを一式ご援助頂いたり、お会いする時に激励の言葉をかけていただいたり、1年間を通して常に支えていただきました。この場をお借りしてお礼申し上げます。

それだけにこの度の結果は、本当に悔しいものでした。西医体期間中に限らず1年間、選手である私たちが良い結果を残せるようにと、陸でも沖でも支えてくれた部員にも申し訳ない気持ちでいっぱいです。

しかし、これから私がすべきことは自分の結果を悔やむことではありません。私がすべきことは、学生OBとして自分たちの代で良かったこと、悪かったことを全て次の代に伝え、次の代を良い結果に導くことだと思います。次の主将である大野純生率いるヨット部を、これからよろしく願いいたします。

結果は全く残せませんでした。1年間主将として部を率いることで、人として少しは成長できたのかな、と思います。これも偏に支えて下さった皆様のおかげだと思います。本当にありがとうございました。

水泳部

総合で入賞できず

前主将 吉田 耕輔 (医学科4回生)

西医体の結果をご報告いたします。今年度の西医体は高知県のかろしおアリーナで開催されました。会場は檜で作られており、プールの諸所で檜がかおる思い出深い大会となりました。結果ですが、今年度は男子総合13位女子総合19位と男女ともに総合で入賞することはかなわず、非常に残念な結果となりました。非常にレベルが高い競技の中、個人種目ではありましたが多くの部員が決勝種目に出場し、滋賀医科大学の名を全国に馳せてくれたことは主将として非常に誇らしく思います。私たち水泳部は部員一同、この大会を目標に日々練習に励んでまいりました。昨年度は男子総合3位女子総合3位という近年まれにみる好成績を先輩方が残して下さったこともあり、今年度の結果は主将として悔い改め次年度に活かさねばならぬ必要があると強く感じています。

私自身、今回の西医体は男子100mFlyで5位入賞、100mFlyで4位表彰という結果となり入学以来、初めてメダルを持たず手ぶらで滋賀への帰途につきました。結果こそふるいませんでしたが、私の泳いだレース一本一本を通じて、応援していただいたすべての皆様に、一時の興奮や私の水泳への熱い思い、部員への愛着などなにかしら伝えることができたと思っております。この1年間主将としてチームを統べることができ非常に幸いに思います。来年度の西医体では最高の結果をご報告できますよう部員一同また1年間、練習に励む所存です。今後とも滋賀医科大学水泳部をよろしく願いいたします。

ハンドボール部

今年は準優勝

阿部 和樹 (医学科3回生)

松山市総合コミュニティーセンターにて、8/12～13に予選リーグ、8/14～15に決勝トーナメントという日程で行われました。予選リーグは琉球大、大分大という九州・沖縄勢という、関西リーグでは普段当たらないチームと同じ組となりました。初戦、2戦目ということで緊張もあり、苦しい展開となることもありましたが、結果としては2勝し1位通過で決勝トーナメントへの進出を決めることができました。決勝トーナメントでは1回戦の香川大、2回戦の大阪医大に対しては危なげなく勝つことができました。準決勝の神戸大戦では序盤は先行され苦しい時間もありましたが徐々に巻き返し、最終的に29-21での勝利を収めました。神戸大に対しては昨年の西医体、同じ準決勝で負けたという苦い思いがありましたので、この勝利は余計に嬉しいものとなりました。決勝の京都府立医大戦は、序盤から差をつけられ、その差を詰めることのできないまま試合終了となってしまう、18-25というスコアで負けてしまいました。以上の試合結果により、準優勝となりました。OB、OGの皆様はじめ一年間応援、またご支援いただいた方々、ありがとうございました。次回こそは優勝できるように年間活動して参ります。

西医体レポート

5

端艇部 7年ぶり 奇跡の総合優勝

主将 松下 詢(医学科4回生)

「京都大学『第X芝蘭』はレーン侵害により失格。決勝は再レースとなります。」

史上最強と言われた芝蘭は痛恨の凡ミスで除外。2位を走っていた滋賀医『暁』に優勝のチャンスが思わぬ形で舞い戻ってきた。しかし、再レースはわずか10分後。決勝当日の気温は37.6℃。波はどんどん高くなり風も出てきた。身体は火照り、思うように動かない。給水のために一度船台へ戻る。そこには、レースを終えた部員全員とOBの先生や引退生が来ていた。みんな、僕らが優勝することを本気で信じている顔だった。

「3 minutes」クルーの呼び込みが始まった。もう後には退けない。これで最後。自分とクルーに言い聞かせる。「僕たちは出来る」と。

「Attention…GO!」レースが始まった。他のクルーもスタートから死に物狂いで飛び出してくる。しかし、僕たちが今まで磨き上げてきた技術についてくるクルーはいない。

700メートル。ここで浜医『湍』が追い上げてきた。僕たちももう一段スパートをかけ

る。7年間、滋賀医科大学端艇部が追い求めてきたものが手に入る。

ゴール。『暁』が一番にフィニッシュラインを駆け抜けた。3'32"10。これ以上ない最高のレースだった。

今回は思わぬ幸運が舞い込み、対校1位そして総合優勝をすることができた。しかし僕の目標は、対校フォアだけでなく全ての種目で表彰台に上れることだ。それが本当の意味での「総合優勝」だと思っている。僕は主将を交代することになるが、これからもチームを支えていきたい。最後になりましたが、応援して頂きましたOBの皆さまありがとうございました。今後ともご指導のほどよろしく願いいたします。



陸上部 多くの選手が自己記録更新

池田 哲也(医学科4回生)

昨年8月に徳島県で行われました、西医体の結果をお知らせします。

- 男子100m 赤田 将……………準決勝進出
- 男子200m 赤田将・池田哲也…準決勝進出
- 男子走高跳 馬場達也……………8位
- 女子円盤投 大沼玲佳……………7位
- 女子ハンマー投 大沼玲佳……………優勝

数年前と比較して部員の数も順調に増加しており、部内の雰囲気のにぎやかになって参りました。また昨年からの選手を専門種目ごとに分け、パートごとに練習するようになったことで1つひとつの練習の目的を共有しながら、まとまりのある練習時間を過ごすことができています。西医体では、残念ながらもわずかな差で次のラウンドに進むことのできなかつ

た種目もいくつかありました。しかし、部員全員が競技中の選手を応援する姿には部としての一体感が窺え、試合の雰囲気に飲み込まれず多くの選手が自己記録を更新していたことには大きな収穫を確かに感じました。次の西医体へ向けて選手全員が現状に満足することなく、来シーズンも自己記録を更新するために各々でテーマを持って練習に励んでいます。



西医体レポート

6

合気道部

演武に幅が

主将 奥田 祥伍 (医学科4回生)

第68回西医体、第19回西医療体の合気道部門は8月14日、15日に開催されました。高知大学様が主幹として高知県立武道館にて行われました。

我々、滋賀医科大学からは西医体に医学科一回生から六回生まで総勢17名、医療体には看護学科一回生から四回生の4名が参加させていただきました。特に今年は我々部員の段の保持者がここ数年のうちでは最も多い年ということもあり、披露する演武にも幅が生まれたように感じます。演武大会の結果につきましては、非常に残念ではありますが滋賀医科大学からは賞を戴く者はおりませんでした。各々精一杯の演武を行い、素晴らしい大会であったと考えております。非常に暑い中の大会ではありましたが、大会の期間を通して、誰一人大きなけがをすることもなく無事に帰ってくることも出来ました。

西医体、西医療体では他の大学の演武を目にし、非常に良い刺激を各部員が感じたと思います。この大会を機に、幹部も交代いたします。いつも多大な御支援を賜っておりますOB・OGの方々への感謝を忘れず、また来年の大会に向けて、精一杯稽古に励んでいきたいと思っております。



卓球部

数十年ぶりの快挙 個人戦の優勝

力武 里菜 (医学科4回生)

OBOGの皆様、いつも応援ありがとうございます。今年も無事に西医体を終えましたので大会結果などのご報告をさせていただきます。

今年の西医体は8/17から3日間、徳島県鳴門市にて行われました。新入部員が7人増え今年男子11名、女子6名の計17名での参加でした。四国への遠征ということで大会の前日は渦潮などの徳島観光を楽しみました。

大会は3日間とも連日の猛暑の中でしたが、団体戦・個人戦共に部員全員が自分の目標に向かってベストを尽くすことができ、また各個人の新たな目標も生まれ非常に良い大会になったと思います。今年の4月に入部し



てくれた1回生、学士編入の3回生もたくさん活躍してくれました。

また今年女子個人戦シングルス優勝、女子個人戦ダブルス3位、女子団体戦ベスト16、男子個人戦シングルス・ダブルスベスト32という輝かしい成績を修めることができました。西医体での個人戦の優勝は数十年ぶりの快

挙であり非常に誇らしく感じております。来年の西医体でも良い成績を残せるようこれからも精進してまいります。

◆ 大学キャンパス中庭にベンチ寄贈 ◆



大学の中庭には、医学科15期生、17期生の卒業記念品を含む20数台の屋外ベンチが設置してあります。そのほとんどの老朽化が著しく、このたびこれらを更新されることに伴い同窓会「湖医会」からその一部を寄贈することになり、過日、渡辺一良会長から塩田浩平学長に贈呈しました。(2016年10月)



年会費について

医学科
卒業会員

会費の割引…自動引き落とし(口座振替・VISAカード)のすべての利用者は、年会費6,000円が5,000円に割引となります。

会費の免除…40年(40回)分を納入したとき、あるいは、満65歳に達しそれまでの会費を完納しているとき(本人からの申し出による)は、以後の会費は免除となります。

2016年度「湖医会」総会 議事録 日時/平成28年10月29日(土) 16:15~17:30 場所/基礎実習棟B講義室

議題

1. '15事業報告及び'15決算について

◇原案(資料1-1、1-2)どおり承認された。

2. '16事業計画及び'16予算について

◇'16事業計画については原案(資料2-1)に、幹事会において修正することとなった次の各事項を追加し、承認された。

○広報の充実

HP(ホームページ)のリニューアル、広報誌の内容充実等広報関係の充実を図ることとなり、その方法等について検討することとなった。

○表彰規程の制定

各界で叙勲を受ける等会員の活躍に対し表彰をすることとなり、規程案について検討することとなった。

○会費の徴収

卒業会員及び大学院会員の年会費のうち、一部[医学科30,000円、医学科(編入)25,000円、看護学科20,000円(終身)、他大卒大学院(博士)20,000円、同(修士)20,000円(終身)]を入学時に徴収すること及び特別会員のうち滋賀医科大学の現職員についても年会費を徴収することが承認され、関係規程の改正を行うこととなった。

◇'16予算については原案(資料2-2)に、幹事会の議のとおり次の事項を一部修正し、承認された。

○「広報充実費」500,000円を新規計上、「記念事業積立費」に500,000円を上乗せし3,500,000円とする。

3. 会則の一部改正について

第19条を次のとおり改正することが承認された。

「名誉会員、特別会員及び学生会員は、年会費の納入を要しない。」を「名誉会員、特別会員(滋賀医科大学に在職する者を除く)は、年会費の納入を要しない。」に改正する。

4. 「湖医会記念会館(仮称)」の設立(案)について

大学創立50周年協賛事業候補計画のひとつとして、「湖医会記念会館(仮称)」の設立(素案)の説明があった。

建物の必要性及び可否、建物に代わる事業の創設等意見交換の結果、湖医会の活性化と併せ今後の対応について検討することとなった。

5. その他

○支部の支援について

承認支部の活動状況を把握するとともに、新規支部の設立を支援することとなった。

※各資料は「湖医会」HPを参照

お知らせ

「湖医会」年会費の自動引き落とし

口座振替をご利用の方は10月12日、一般VISAカードの方は10月15日となります。なお、便利な口座引き落としの利用をご希望の方は事務局までご連絡ください。

名前・住所・勤務先・メールアドレス等が変更になった場合は、メールまたはファクスで事務局までご連絡ください。



表紙の写真：附属病院

訃報 謹んで哀悼の意を表します。

- 平成27年2月25日 上田 敬一(医9期生)
- 平成28年10月27日 中村 二郎(医5期生)
- 平成29年2月10日 切通 彰(医2期生)
- 平成29年2月13日 西田 保裕(医3期生)

(特別会員)

- 平成28年9月13日 青山 喬先生
(名誉教授:元放射線基礎医学講座教授)
- 平成29年1月22日 尾崎 良克先生
(名誉教授:元副学長【微生物学】)